



東京都中央区築地5丁目3番2号郵便番号104-11
朝日新聞東京本社
電話03-3545-0131
郵便振替口座 00100-7-1730
©朝日新聞東京本社 1994

主な記事から

- 上場企業社員、半年で14万人減 (3面)
- 韓国、保安法巡り対立が激化 (9面)
- ペットセラピー、不登校に効果 (15面)
- たん薬に副作用強い薬剤混入 (23面)

日中戦争時の毒ガス使用

大本営が文書で命令

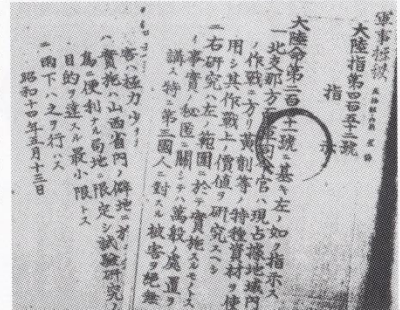
防衛研の資料で確認

日中戦争の時、天皇に直属する最高の統帥部である大本営が、イペリットなどの致死性毒ガスの使用命令を出していたことが分かった。防衛防衛研究所(東京都目黒区)が保管する未公開のマイクロフィルムに写されていた極秘文書から裏付けられた。研究者たちによると、これまで致死性ではないおろ吐性や催涙性ガスの使用命令は確認されていたが、日本軍の中核からの命令によって猛毒ガスが使用されていたことが明らかになったのは初めてだという。(22面「関係記事」)

見つかったのは、大本営「面軍司令官」において、一九一三日で出された「大陸防衛部から中国の北支那方」三九年「昭和十四年」五月「指第四百五十二号」という

文書。B4判の大きさの紙に墨字で書かれ、軍事極秘という判が押されている。

同文書は、現出拠地城内ノ作戦ニ付黄荆等ノ特種資材ヲ使用シ其作戦上ノ価値ヲ研究スヘシ」と毒ガスの使用を謀議総長の名で現



マイクロフィルムから取り出した「大陸指第四百五十二号」(一部)

一次大戦で毒ガス戦を経験してはなかったため、得相の対り戦に備え、中国軍相手に実験や実戦での習熟をしようとなつて、ひんぱんに毒ガスを使うようになった」と説明する。

中国軍部がまとめた資料によると、日中戦争が始まった三十七年から終戦までの八年間に、日本軍は少なくとも各種の毒ガスを三千九十一回使用した。死傷者は民間人を含む八百人以上に上つたという。



日中戦争時の毒ガス使用 命令の原本が消えた

大本営が日中戦争のときに出したイペリットなどの猛毒ガスの使用命令がマイクロフィルムに残されていた。しかし防衛防衛研究所(東京都目黒区)が保管する大陸指の原本からは、問題の「大陸指第四百五十二号(一九三九年五月十三日付)」が消えていた。

大陸指 米軍の目を意識か

大陸指は、三五五六一号まであり、十四巻に分けてとびだれている。巻頭にある「大陸命、大陸指」経歴表によると、一九四五年八月十四日、陸軍に保管書類の焼却指が出された。陸軍参謀本部第二課(作戦課)は保管する書類のうち大陸命、大陸指だけは焼かず、都内に隠した。

四五年末から翌年二月中ごろにかけて第一復員省史実調査部が極秘に複数の写しをタイプ打ちで作った。この際、米占領軍に渡った場

合を考慮して、内容の一部を省きたり、司令官の名前を省略したり。原本はその後、元将校の自宅に保管され一九九九年九月の項目の中の猛毒ガスを意味する「黄(き)」剤という言の部分が塗りつぶされていた。

戦史部の永江太郎・史料班長は「今となってはなぜなくなったか分からない。しかし当時の人が具合の悪いものでもマイクロフィルムの方に残しておいたのは、(歴史に対して)まじめだった」と評価できると



ているマイクロフィルムは公開されていない。この秋

大陸命、大陸指を出版する東京都中野区の「エムティ出版」が、防衛庁の許可を得てマイクロフィルムから取り出した原簿を手チェックしている時に偶然出てきた。出版社は「こんな貴重な資料があるなら、マイクロフィルムに入っているすべてを収録したい」という。

「五十年以上前の公文書を読みだすには公開しないのは、時代錯誤もはなはだし。マイクロフィルムも含めてすべて公開すべきだ」と中央大学の吉見明教授(日本現代史)は話す。

防衛防衛研究所が保管する「大陸命」と「大陸指」(手前の原本、イペリットなどの毒ガスの使用を命令した「大陸指第四百五十二号」は原本からなくなっていた)9日、東京・目黒で